
清成学園物語

ビーシア

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

清成学園物語

【Nコード】

N5280W

【作者名】

ビーシア

【あらすじ】

全寮制のお嬢様学校「清成学園」

薄桃の花びらが舞う中新学年を迎える。

不安と期待を膨らませクラス割りと寮の部屋振りをみて、愕然とする力オル。

同室となるレンとは去年の因縁があった。

時を共にするうちレンに惹かれる力オリ。

どんなに距離を縮めたいと願っていても届かない思い。

どうしてそんなに冷たいの？
距離を置こうとするの？

私立清成学園のガールズラブストーリー。

月明かりのキス（前書き）

ガールズラブです。

卑猥な性描写はありません。（それらしい場面は出てきます）

なお連載です。

これからどこぞ登場人物を出していきます。

たまに別の人が主人公になったりします。

月明かりのキス

賑やかというより騒がしい学生たちの中、自分だけが新しいクラスメイトや寮の同室者に期待することなく、むしろげっそりと掲示板に張り出された表を見ていた。

佐々木香穂理。2 - C。206号室、同室者北條蓮。

よりによって……。滅多に同じクラスで同室という・またその反対もしかりー環境を学校側が配慮しているにもかかわらず、なぜ自分だけがほぼ24時間生活を共にしなければならぬのか。しかも相手はあの、北條蓮。あいつなんかと24時間一緒の空間にいるなんて、無理。絶対無理。

なにしろすべてにおいて私と正反対なのだ。話が合うわけがない。

第一

自分は北條蓮が大っ嫌いなのだ。

しかしここで何時間も眺めていても表の文字が変わるわけでもない、仕方なく荷物でパンパンになったボストンバックを持ち直した。

荷物が重いせいもあるけど、これからの1年を思うと自然と歩く速度がゆっくりとなる。

広い玄関ホールをくぐると、それまで忙しく新しい自分の部屋と廊下を行き来していた、同じ新2年生のみんなが一斉に自分を見る。自意識過剰ではなく、しばらくは何かと注目をあびることになる。なぜならあいつの同室者だから。

やつかみ半分、羨ましそうなのが半分っていったところかな。

「……………あまり気にしないの。注目されているのもせいぜい1週間ぐらいなんだし」

声をかけられのと同時に肩をたたかれ、思わずもういじめ!?!と

慌てた。

振り返るとそこには去年の同室者、森口美由。

「なんだ、ミュカ。脅かさないでよね」

ミュはスリッパに履き替えながらニヤニヤしている。

「わるいわるい。あんまりにもしょぼくれてた背中だったからさ」

あまり悪いって思ってたなそう。ジロリと睨みあげた。

そのまま二人並んでソファアが並んでいる学生室に向かう。

みんな自分の荷物の片付けで、のんびり休憩する暇なんてないから、ガラガラ。設置されている自動販売機で飲み物を買って、一番奥のソファアに座った。

「しかし女の子の気持ちはよくわからないな。あれは憧れの範囲を超えているよ。まあ、崇拜っていうの？そんな子もいるし、結構本気で惚れている子も多いだろうね。私からみたら女が女に惚れるってやつが一番わからん」

「ミュは外に彼氏いるものね」

「うん、だから余計なのかも。でもレン相手だとわかる気がする」

『レン』って呼び捨てできるんだ、さすがなミュ。

「北條さんって綺麗なものね」顔だけはイイと認める。本当に顔だけだけど……。

「そうそう。ただ綺麗なだけじゃなくて色気もあるじゃない
は？色気？」

「それにレンが異常なほどモテるのって顔だけじゃないし」

「それって大金持ちだからってこと？」

一応清成学園はお嬢様学校なので、比較的裕福な家庭の人たち（あたしもだけど）が多いけど、その中でも北條蓮の家はダントツでうわさによるとどこかの国を替えてしまっぐらい資産を持っているとかいないとか。

この学園も北條家が経営している。つまり理事長の娘で、学校以外にも病院やら国内国外にいくつもの企業を持っているとか。つまりとんでもないお嬢様だ。

父親が大学教授だけの私とは大違い。

「そうじゃなくてさ。もちろんそれもすごいけど、なんていうか全部すごい」

「まあ、確かに入学してからずっと首位だもんね。春休み運動部の手伝いでなんか大会まででたんでしょ」

そういう私は成績はどんなに頑張っても中の下かよくても上の下。運動も得意ではない。

ほら、やっぱり合うわけない。

差がありすぎてますます気持ちが悪くなる。無意識にため息をついた。

いやな記憶も出てくるし………。

察しがいい学歴2位のミユが心配顔で

「なに？もしかしてまだあの事件引きずってる？」

うん………と頷いた。

いつまでも止まない拍手。

カーテンコールも終わり、気の早い幾人かが既にコートを羽織っている。

あたしは目を閉じてついさっきまでの演奏を思い出していた。

クラシック音楽もたまにはいいかも。

そう思えるぐらい、とても素晴らしかった。

もう少し余韻に浸っていたいけれど、後ろの席に座っている隣のクラスに退出の号令がでている。次がうちのクラスの番だ。

仕方がない。目を開けて帰り支度をするか、と思った矢先、唇にプニッとなにかが当たった。グミをやわらかくして温めたみたいなの。そんな感じ。

遠くの方で声があがる。

なんだろ？

目を開けると、目の前に顔があった。相手の顔が離れるまでキスをされていることがわからなかった。

「あ……あたしのファーストキ、キス」
慌てて唇を押さえたけど時遅し。

「アハハッ。ごめん。つつい」

そう言って爆笑している北條蓮。少しも謝罪の気持ちを感じられない。

そんなことより……。

「ぎゃあああ！」

私の叫び声も大勢の生徒の悲鳴にかき消された。

忘れたくても忘れられない去年の12月の音楽祭のキス事件。

あのあと、3、2年生の先輩たちにまで知れ渡って、軽い嫌がらせまでされていた。

「せつかく3年が卒業して、これで嫌がらせがなくなるってほっとしていたのに。これじゃ同じ2年からもされそうだよ」

よしよしとミュが頭を撫でってくれるけれど、少しも気分が浮上しない。

「レンに守ってもらえばいいじゃん」

うんうん、それがいい。一人で納得しているけど、北條に守ってもらう自分の姿が全くもって想像できない。

2階で3階に部屋があるミュとは別れ、決められた206号室のドアの前。

ノックをするか、あるいはしないで黙って部屋に入るかで悩んでいる。

ノックをする「こっちが下で出る。遠慮している」なめられる。ノックをしない「無作法だと思われる」これまたなめられる。

同じなめられるならどっちがいいかしら。うーん。

礼儀としてドアをノックする。あくまでうわべだけの礼儀。そうするように育てられているからなだけ。

「はい、どうぞ」

中からいくらはハスキーな声。間違いなく部屋に北條がいる。

急に、緊張してきたのかドキドキしはじめた。ドアノブを握っている手が汗かいてきた。どうしよう、ドアが開けられない。

いつまでも部屋に入ろうとしない来客に痺れを切らしたのか「どうかしたの？」という声と共にドアが内側から開いた。

ドアノブを掴んだままだったあたしは急に引つ張られて体制を崩す。

「危ない」

白い手が私を支える。北條の体温とかすかに香るユニセックスな香水の香りを感じて、身体が熱くなる。

「ご、ごめん」

当たり前のようにあたしのボストンバックを持ち、右側のベットの上に置く。

「私のほうこそごめん。急にドア開けたからだよね」

「う、ううん。あ、荷物ありがとう」

自然と視線が北條の唇にいく。

薄くもない厚くもない綺麗な輪郭の唇。

本当にあたしはあの唇とキスをしたのかな。

「随分遅い時間に来たのだね。カオリ」

いきなりの呼び捨てに、思わずバックから出した教科書を落とすようになる。

「あ……ミユとちょっと話をしてて。北条さんは早く来たの？荷物もう片付けてあるから」

「『レン』でいいよ」

「あ、う、うん」

「これから1年よろしくね。カオリ」

握手を求められ、握る。

綺麗な人とは指まで綺麗なんだ。

「荷物片付けるの手伝うよ」

早く片付けて一緒に桜を見に行こうね、とウィンク。

ドキリとした。

その後天下の北條蓮に荷物の片付けを手伝ってもらい、そのまま中庭に桜を見に行った。きらきらと夕日に光って舞い落ちる花びら。二人して散々騒いだ後、学食で夕飯を食べ、交代でシャワーを浴びて、あとは消灯時間まで自由時間。

レンはベットに仰向けで寝転がり本を読んでいて、私は机に向かって習慣となっている日記を書いていた。

窓から月がのぞいていて、木々を薄暗く照らしているのがあまりにも綺麗で、手を止めては月を見ていた。

「UFOでも見えるの？」

本を読んでいると思っていたのに、レンはあたしを見ていた。

「UFOだって。面白いこと言うね。月が綺麗だから見ていたの」

「月？ああ、たしかそろそろ満月だっけ？」

「かな？結構丸いからそうなのかもしれない」

レンもあたしの横に並んで月を見る。

「本当だ。綺麗」

「うん」

明かりを消してみようとレンが言う。そうだねと頷く。

青白く澄んだ月の光がレンを照らす。思わず見とれてしまう完璧な横顔。

この人って本当に綺麗なんだ。つくづく思う。

「……ごめんね」

ふいにレンが呟く。聞こえるか聞こえないかの小さな声。

「何が？」

「……うん。去年のアレ」

いいにくそうに言葉を濁したけれど、アレが去年のキスのことだとわかった。

「うん。からかっただけでしょ？もういいよ」

今朝まで絶対に許せないと思っていただけで今日一日一緒にいて、

楽しかったし、こうやって真剣に誤ってくれているのがわかる。

「・・・・・・・・違っよ」

「ん？」

「謝っているのはたしかにキスしたことだけど・・・・・・・・」

レンの指がそつと私の指を握る。

なんだろ・・・・・・・・。なんだか変な気持ちになる。

「からかってキスしたわけじゃない。あの時力オリの顔を見ていたらキスしたくなったから・・・・・・・・したんだよ」

驚きすぎて言葉が浮かんでこない。

ぎゅつと強く手を握る。

「あれから私も考えてたんだ。私は別に女の子が好きってわけじゃない。なのはどうしてなんだろうつて、ずつと考えてた。そのうち力オリがあのこと嫌がらせを受けているって知って、つからった・・・・・・・・。本当は何度も謝ろうと思ったんだ。でも怖くて。拒絶されたらどうしようと思うとできなかった。今日同室とわかって、どうしたらいいのか正直にいうと不安だったけれど、でも力オリが普通に話しかけてくれたから、こうして謝ることができた」

一気にしゃべると照れたのか「もう寝るね」とベットにもぐってしまった。

その夜あたしはずつと眠れずに、レンが言った言葉を何度も繰り返していた。

ようやく明け方ウトウトしてきたとき、そつと自分じゃない体温を感じたけど、たぶん気のせい。

月明かりのキス（後書き）

ボーイズラブがはやっているならこの際ガールズラブもはやらせたい！

と、一念発起。

高校生を卒業して早十数年。

あのころどんなだったなんて覚えちゃいない。

でも恋の味は覚えていた！！

まだまだ続きます。

誤字脱字あるかと思いますが、読んでやってください。

月明かりのキス 2 (前書き)

前回の続きです。

月明かりのキス 2

入寮日の次の日は新一年生の入学式があり、入学式の次の日が始業式。

始業式が終わると、いよいよ2年生生活のスタートだ。

朝、下駄箱を開けると上履きの上にいつものごとく手紙が入っている。内容はおそらくラブレター。いったい私なんかのどこがいいのか、入学してからこのかた学校が休みの日以外この手の手紙が入っていない日がなかった。

封を開けずにそのままゴミ箱に捨てる。これも入学してから変わらない。もともと恋愛には興味がなかった。

ましてや今、好きな相手がいるのだ。片思いとはいえもうわけにはいかない。

私の好きな人は私を待っている。

手紙に気がつき「相変わらずモテるね」と笑いながら私の隣に並ぶ。

好きな子以外にモテてもねえ……………小声で呟く。

「何か言った？」

「なんでもないよ」

この間の私の話。彼女はどう思ったんだろ……………。

あれからカオリとはよく話すようになった。とりとめもないことばかりだけど、誰でも好きな人との会話は嬉しい。

好き。

そう自覚したのは、あのキス事件からだいぶ時間がたってからだった。

好きかどうかを考える前に、よりによって同性の子にキスをして

しまったショックのほうが大きく、それどころではなかった。

3学期の中間テストを目前に控えたある日、悩みすぎて寝不足の日が続いていた私はとうとう体調を崩し、朝から保健室のベットの上にいた。

うとうとしては目が覚めるを何度か繰り返し、そろそろ教室に戻ろうかと思ったそのとき、何人かが保健室に飛び込んできた。

「先生いないよ。どうしよう」

「とりあえず冷やしたほうがよくない？」

怪我でもしたのかな。あいにく校医の先生は不在で薬棚には鍵がかかっている。

カーテン越しからも慌てているのがわかる。

これは1時間ぐらいしたら校医がもどってくるから、と教えたほうがよさそうだ。

ふらつく体をなんとか立たせカーテンに手をかけた。

「カオリ大丈夫？」

「平気」

聞こえてきた名前と聞き覚えのある声に、私は再びベットに横になった。

鼓動が早くなる。

よく聞こうとして呼吸が止まる。

「それにしてもあいつらも段々嫌がらせがエスカレートしてるじゃん」

「あたしは大丈夫だから。それより誰か休んでるみたいだから静かにしようよ」

「カオリったら、もう。今日はたまたま運がよかったけど、階段で足を引っ掛けて転ばすなんて。カオリ死んでたかもしれないじゃん」

「そうだよ、カオリ。うちらがいなかったら今頃救急車騒ぎだったよ」

「………うん」

「はあ」。元はといえばあの馬鹿のせいだね。北条蓮の！」

自分の名前を呼ばれてギクリとする。

そつとカーテンを開けて隙間からのぞく。

カオリが足に氷を当てながら座っている。

それを守るかのように何人かがいらしながら囲っている。

好かれているんだんな………と関係ないことを思った。

それと同時にどうしたらいいのかわからなくなる。

自分が彼女にしたことは、後先も考えない馬鹿な行為だった、それはわかる。

でも、綺麗だと思ったんだ。

照明に光った涙。薄く開いた唇。

自分と同じように涙を流すほど、演奏に感動したんだろうかと気になって目が離せなかった。

小さく息を吐くのを見ていたら、たまらずキスをしていた。

周りの人たちとか全く考えずに、自分でも気がついてたらしめた。

今でもあの日の自分の行動を考えているけど、ただキスをしたくなつたとしかわからない。

あの事で嫌がらせを受けているのだとしたら、その責任は自分にある。

あの時は自分でも自分のしたことに動揺して、きちんと謝ることすらできなかった。

謝ろうと思つてた。

けれどタイミングが………いや、責められるのが怖くて避けていた。

普段はあまり人に好かれたり嫌われたりする事にそれほど頓着していないけど、彼女に嫌われているのを知るのが怖くて仕方がなかった。

でも今、怪我をして目の前にいる。

ここで謝らなければたぶんもうずっと謝れない。

どうしよう。今更何と言って謝ればいいのか………。

「大丈夫だから、そんなに怒らないでよ。それに北条さんは関係ないから」

心臓が、呼吸が、頭の動きが、一瞬止まる。

私をかばった？

そのカオリの一言で、私はどこか守られたような気がした。

大丈夫なわけがない。

それなのにたいした事じゃないと笑っている。

原因の私をかばおうとすらしている。

私にはない本物の強さを彼女に見た。

そしてその強さに自然と惹かれた。

それからカオリのことになり、春休みを迎える頃には好きになっっていた。

新学期、寮の部屋が同室になり、生まれて初めて緊張をした。

どうやってあの事を謝ればいいのか、困惑した。

何を話したらいいのかわからなく、部屋でカオリを待っている間も逃げ出したくて仕方がなかった。

でも、カオリは最初は緊張していたみたいだったけど、その晩にはもう普通に話しかけてくれた。

だから私もきちんと謝ることができた。

カオリのおかげだ。

少しずつ会話が増えお互いに「レン」「カオリ」と呼び合うのになれた頃には、もう後戻りができないほど好きになっていた。

クラスメイトと朝の挨拶をしながら席に着く。私の左斜め前の席でカオリが小さく声を上げた。

「どうした？」

ここ2日間、私は過剰なほどカオリへの嫌がらせに目を光らせていた。

「現国忘れてた。ちょっと美由の所で借りてくるね」

「ついて行こうか？」

「平気」

そう……声に出さず心の中で呟く。

カオリの口から「美由」と聞きたびに心がざわつく。

元同室だったから仲が良いのは理解しているし、二人の間に友情しかないのも知っている。けれど落ち着かない。

自分の事を好きになってほしいと言わない。けれどもっと近づきたい。

できればただの同室者でクラスメイトじゃなくて、友達のポジションでいいから必要とされたかった。

授業開始ギリギリに戻ってきたカオリは、現国の教科書を笑顔で私に見せて席に着く。

その後授業が終わるまで、一度も私に振り返らない。

私に笑顔を見せてくれるだけで、善しとするか。

あるいは無理やりにも距離を縮めるか。

悩み事は尽きることなく、欲が出てきた分増える。

「レンは明日外出するの？」

始業式から3週間経ち、新しい暮らしにも慣れはじめた土曜日の夜。

長い髪をタオルで乾かしながらカオリが尋ねてきた。

私はお風呂上りのカオリにドキドキしていたので、すぐには答えられずに「どうだろ」と誤魔化した。

本当は机の引き出しの中に、明日までの映画のチケットが入っている。「一緒に行こう」と言い出せずにいたままだった。

「もし予定がないなら一緒に街にでも出かけない？」

毎週のように誰かしらと街に出かけているカオリ。

私は逆にどこも出かけずに一人寮に残っていることが多かった。

「……どこか行きたい所でもあるの？」

美由さんじゃなくていいの？心の中だけで聞いてみる。もちろん答えはない。

「実は見たい映画があつて。その映画明日までなんだけど、一人で見るのはちょっと怖くって」

「怖いって、ホラー映画なの？」

「うん」とにつこり。

残念。机に入っているのは思いつきり泣けると噂の恋愛映画だ。

「カオリってホラー系好きなの？」

イメージ的にはファンタジーとか恋愛系が好きそうなの？

「うん！大好き！でも怖がりだから怖いシーンはあまり好きじゃないんだ」

またもやにつこりと笑う。私が好きと言われたわけじゃないのに、なんか幸せな気分。

「いいよ、行く」

「やったあ！美由なんかああ見えてホラー系とかダメでさ、全然付き合つて縋らなかつたのよ。だから観るのをなくなくやめた物も多くて……」。レンが同室でよかった」

今から楽しみだと、いそいそと目覚まし時計をセットする背中を抱きしめたい。

抱きしめて、思いつきり甘えさせて……。

「……おやすみ」

電気を消して私もベットにもぐりこむ。

きつちりと目覚ましをセットして。

微かな規則正しい寝息をたてるカオリ。

かわいくてかわいくて、学期が始まってから無防備なカオリの寝顔を見るのが癖になった。いつものようにふつくらとした頬に手を当てると、自分から擦り寄ってくる。

こんなにも好きなんだ……。

改めて感じる時間。

「……好きだよ」

怖くて、こうして寝ている時じゃないと言えないけど、どうにか

なりそうなくらい君が好き。
そつと額にキスをする。

「ああ、怖かった」

翌日の日曜日の昼下がり。
ファーストフード店で観て来た映画の感想をお互いに言い合っていた。

コーラーをずっと飲みながら

「大丈夫？もし今夜怖くて眠れなかったら私と一緒に寝る？」

冗談半分、願望半分。

ハンバーガーを頬張りながら、首を横に振る。

怖い好きなのに怖いのが苦手と宣言したとおり、怖いシーンになると目をつぶっていたカオリ。

目をつぶっても耳は聞こえるので、ぎゅっと私の手を握っていた。それでも、強がって見せるなんて、かわいいな。

「ふん。んじやもし今夜私のベットに来て入れてやんない」

今度はあつかんべーをしてきた。

「なにそれ。すっごい不細工な顔」

二人で笑いあう休日。うん、悪くない。

夜、最後まで大丈夫といていたカオリだったけど、目がベットに入る私を追いかけて、顔にはでかかと「もう寝ちゃうの？」と書いていた。

私はそれに気がつかない振りをして「おやすみ」

わざと背を向ける。

豆電球のオレンジ色。時計の秒針が進む音。

どのくらい経ったのか、小さい声で「レン、もう寝ちゃった？」

とカオリが私を覗き込んだ。

もう少し意地悪をしてやろうと思ったけど、それはかわいそうなので「起きてるよ」と答える。

「そう……」

返事をしたつきり、私のベットから自分のベットにもどる気配がないカオリ。

両手に枕を抱えている。

「あ、あのね……」

「クスクス。……一緒に寝る？」

と、布団を持ち上げ、一人分のスペースをあける。

ちよつと迷っている。自分のベットを見て私のベットを見る。

小動物みたいでかわいい。

もう一度「おいで……」

こくつと頷き、おずおずと私の布団に入る。

「あつたかい……」

二人寝るには狭いので自然と身体が密着する。カオリの手が私の手を握ってきた。

一瞬身体が緊張する。

頭をもぎ上げた欲望を無理やりねじ伏せる。

「今度こそおやすみ」

耳元で囁くとくすぐったそうに笑った。

好きだよ。

そつ、言ってしまったらしいのに。

でも何かが変わりそうで怖い。壊れてしまいそうで怖い。

怖いからいえない。

言えないからつらい。

今を失うくらいなら、つらくても言わないほうがいいのかもしれない。

そろそろどうするか、どうしたらいいのかを決めなくちゃいけない。

そんな気がする。

月明かりのキス 2（後書き）

前回の続きです。

今度は北条蓮からみた内容です。

こんな小説でも、なんとお気に入り登録が数件されていました。驚きです。

びっくりです。

そしてありがたいです。

文法間違いだったり誤字だったりと、拙すぎる文章なんですが、それでも嬉しいですね。

深夜にもかかわらず「うひょひょ」と大声で喜んじやいました。本当にありがとうございます！

感想を書いてくれる方たちにも感謝です。

もともとボーイズラブ大好きでしたが、やはり女性からみるときゃ〜とはなるけど、きゅんってしたり、どきどきしたりしにくく、丁度某小説がアニメ化され、いわゆる百合文化も浸透してきたころ、「そんなにきゅんきゅんしたいなら、YOU自分で書いちゃいなYO！」と友人に言われ、深夜ノファミレスでキャーキャーいいながら書いていたこのシリーズ。

今まで友人にしか見せていなかったのですが（ほら、下手だし）別の友人が「YOU、文章かいてるならネットで投稿しちやいなYO！」と言われ、「ME書いちゃうZE！」と、本当にその場のノリ的な感じで始めたので、読者数0とか予想してたんですね。

なので本当に本当にありがたいこともあり、驚きもあります。

次回で「月明かりのキス」は終わりの予定です。でも、シリーズ物なのでシリーズは終わりません。

もちろん「月明かりのキス」の次の話もただいま執筆中です。
楽しんでくれれば嬉しいです。

ではまた。来月頃に！！

月明かりのキス3（前書き）

前回の続きです。

月明かりのキス3

レンと一緒にのベットで眠ったあの日から、何か変。

レンと自分の間に確かにあった、温かい何かが消えてしまったような感じがする。

朝起きて一緒に学校に行って、一緒に寮に帰る。

今までと何も変化ない日常だけでも、自分でもはっきりとはわからない何かを感じる。

どこがおかしいのか見付けたくて、レンを見ることが多くなった。そしてあたしと視線が合うとさりげなさを装って視線をそらすレンに心がざわつく。

そしてそれを寂しく、辛く感じる自分もわからなくなっている。

レンとの関係と自分の気持ちがどうしたらいいのか答えを見つからないまま、あと数日で待ちに待ったGW休暇を迎える。

「レンはGWは帰省するの？」

二人で洗濯室でのんびりと洗濯が終わるのを待っているながら、誰かが置きっ放しにしているファッション雑誌を読んでいたレンが「帰らない」と顔も上げずに短く返事をする。

最近レンはあまりあたしと会話をしなくなった。元々おしゃべりタイプじゃないけど、あまりあたしと話したくないのかと思えるほどに言葉数が減っていた。

そんな明らかな変化にあたしは毎回戸惑う。

「ずっと寮にいるの？」

「………うん」

「去年もそうだったの？」

「………うん」

「………そうか」。あたしも今年はここに残ろうかな」

軽く言っただけ、本当は少しでもレンと一緒にいたいから。なん

で急にそっけなくなつたのかその理由も知りたい。でもそれよりもっとレンに近づきたかった。

このままGW休暇を迎えてしまつたら、休暇明けどんな風にレンと接すれば良いのかわからなくなる。だからこのままじゃ駄目だと思つ。

「・・・・・・・・帰つたほうがいいよ」

「え？」

水の音がうるさくてよく聞こえない。

「なにも私が残るからといって、カオリまで残らなくても良いよ。私は平気だから」

心が冷える。もしかして拒絶された？それともあたしの勘違い？

「・・・・・・・・そ、そんなに強がらなくてもいいじゃない。本当はあたしがいないと寂しいくせに」

声が震える。レンの冷たい態度をどう受け止めたら良いの？

どうやったらレンはあたしの顔を見て、以前のようにやさしい目で笑ってくれるの？

わからない。

わからないよ、レン。

「別に寂しくないよ。丁度一人になって考え事をしたいって思つていたから。むしろいてくれないほうがいい」

やっと雑誌から顔を上げて、あたしを見てくれた。

見てくれたのに、言われた言葉が心を刺して痛い。

痛くて痛くて、どうしようもないほど寂しい。

「・・・・・・・・あたし、要らないって言われたら、もう何も言えない」

「・・・・・・・・カオリ？」

泣く姿を見せたくない。

あたしは逃げるように洗濯室を飛び出した。

どうしたらいいんだろう。

あたしは何を間違えた？

「少しは落ち着いた？」

コーヒーが入ったマグカップを渡しながら、ミユが静かに聞いてきた。

そのあつたかさにまた泣きそうになる。

「・・・・・・なんとか」

気を抜くとまた泣きそうになるけど・・・・・・と付け足した。

「私はさ、てつきり二人うまくいくって思ってたんだけどな。現にカオリはレンといつも一緒だったわけだし。ずっと仲良くやっていたんでしょ？」

仲良くやっていたと思うけれど、それはあたしの考えでレンはそうじゃなかった。

迷惑だったんだ。

「・・・・・・喧嘩したの？」

「わからない。あたし馬鹿だからレンが迷惑しているって気がつけなかったから、レンに嫌われてるって気がつけなかった」

ぎゅってカップを握る。

あたし自分で言っていて自分で勝手に傷ついている。

「そういえば去年一度だけあんたの事聞かれたことがあった」

「あたしのこと？なんて？」

「佐々木香穂理さんは元気にしているかって」

元気にしているか？

去年？

「なにそれ」

「さあ？でも真剣な顔で聞いてきたから、今は少し元気がないけれど、そのうち元気になるから大丈夫だと思うって答えておいた」

「そ、そうしたら？」

「そのうちっていつなんだろ」

「？」

「そう言っで自分の席に戻っていった」

ゴクリとコーヒを飲み、ミユの話の続きを待った。

「で、後になつてわかったのよ。あれつてたぶんあんたが上級生たちの嫌がらせで落ち込んでいたから、心配したんだと思う」

レンがあたしを心配？罪悪感とかじゃなくて？

去年の嫌がらせで確かにあたしは落ち込んでいた。

怪我をしたこともあるし、心労で寝込んだこともあった。

そんなあたしをレンは心配してくれていたの？

「そんなレンだから二人はうまく良くと思ったのにな」

泣きながらミユの部屋に飛び込み、ろくに話もできずにわんわんと泣いていたあたしを、ただ黙って抱きしめてくれたミユ。

「こんなんだつたら今年もミユがよかったな」

つい弱音が出る。

「こらっ」

頭を軽く叩かれる。

「弱気になるのはまだ早いぞ。理由を知りたいならぶつからないと」

「……無理だよ。これ以上嫌われたくないもん」

「だからってこのままにはできないでしょ？前でも後ろでもなんでもいいから、とりあえず進まないでだめだよ」

「う……ん」

「それに、私が思うに嫌いだから冷たくなったわけじゃないと思うけれど。むしろその逆な気がする」

「逆？」

「そう逆。後は自分で考えな。……ほれほれもうすぐ消灯時間だよ。自分の部屋に戻ってレンと話し合ってみな」

「部屋に戻るの嫌だなあ……」

本音をぼつり。

「ヒントをあげる。レンは私の事が好きじゃない」

と言つて、コーヒがまだ残るマグカップを取り上げた。

仕方なく廊下に出ると、そこにレンがいた。

「レン・・・・・・・・」
びっくりした。

レンはあたしと目が合うと、黙ってあたしの手を引いてあたしたちの部屋206号室に入る。そして向かい合う状態でお互い自分のベットに座る。

謝らなくっちゃ。

でもどういったら良いのか、また失敗しっちゃったらどうしようかとなかなか言えずに、言葉を探していると「いままでずっと美由さんと一緒だったの？」

静かな声だった。もう怒っていないのかな。

「うん」

「・・・・・・・・親友だもんね」

レン？

「どんなにがんばっても親友には勝てないか。・・・・・・・・それで美由さんに慰めてもらってたの？」

まただ。また冷たい目であたしを見る。

不安と恐怖で心がすくむ。

でも、ミユが言ったように今のままじゃレンもあたしも駄目だ。このままじゃ駄目になる。

だから・・・・・・・・。

「・・・・・・・・あたしもレンに聞きたいことがあるの」

怖いけど、でも進む。前でも後ろでもいいから進みたい。

勇気を出せ！自分！

「どうして最近冷たいの？あたし何か怒らせるようなことした？」
まっすぐにレンを見ると、レンがあたしから視線をそらす。

「別に・・・・・・・・」

一言。たった一言で、あたしが必死に伸ばした手を払いのけた。
泣いちゃだめなのに。
でも止まらない。

悲しくて、ショックで。悔しくて。

近づきたいのに、近づけなくて。

「・・・・・・・・・・もういい」

悲しいのを通り越して、行き場のない感情でぐちゃぐちゃする。
感情が爆発する。

「もういい。もう言わないし話しかけない。それでいいでしょ？
そうしてほしいでしょ？お望み道理そうしてあげるわよ」

思いつきりレンの顔に向かって枕を投げつける。

枕の次はぬいぐるみ。ぬいぐるみの次は本。

悔しい。あたしの気持ちなんてレンには届かない。

こんなに大切に思っているのに。大事なのに。

失いたくないぐらい、代わりがないぐらい大好きなのに。

・・・・・・・・・・大好き？

教科書を投げる手が止まる。

あれ？ちよつと今何を考えた？

大好き？あたしが？レンを？

「うそ・・・・・・・・・・」

「？」

チラリとレンの顔を見る。

腕で顔をかばっているレンと目が合う。それだけなのにドキドキ
する。嬉しくなる。

「・・・・・・・・・・ちよつと待った」

「カオリ？」

あたしが物を投げつけてこないのでもレンが不思議そうな顔をする。
それをあたしも呆然と見つめる。

「・・・・・・・・・・距離を置かれたみたいで寂しくて辛くて。でも大切
で、諦めたくなくて、でも辛くて。でも失いたくないと思ってどう
したら良いのかわからないけれど」

支離滅裂な話レンが驚いている。

「・・・・・・・・・・目が合うだけでドキドキして。笑いかけてくれるだ
けで嬉しくて・・・・・・・・・・」

そして大好きで……。

最後の言葉はレンからのキスで閉じ込められた。

「……………レン？」

またキス。

「私もカオリが好きだよ。ずっと好きだった」

レンの言葉が嬉しくて自然と笑顔になる。

「あたしも、レンが大好き」

そしてまたキス。

気持ちを通じたのがとても嬉しくて、素肌にレンの手が滑り込んできても怖くはなかった。

明かりを消す。

レンの白い肌が月明かりの中青白く輝く。

レンの手があたしをなぞる。

キスの合間にお互いに愛を囁く。

怖いとか、

緊張とか、

そんなものより、たまらなくレンが欲しい。

もっと触れて欲しい。

もっと触れたい。

もっとレンの体温を感じたい。

もっとぐちゃぐちゃにしてほしい。

もっと好きだと言って欲しい。

止まらない欲求を

「もっと、キスして」

激しいキスでレンが答えてくれる。

頭がとろけそうになる優しい愛撫。

レンの指があたしの中に入ってきたとき、

痛いのにでも嬉しくて、幸せで。

知らず知らず涙を流すと、

レンがキスでその涙を拭う。

「カオリ……愛してる」

レンのハスキーな声の囁きに、あたしもどうにかなりそう……

ふっと目を覚ますとレンが隣で寝ている。

初めて見るレンの穏やかな寝顔に、愛おしさがこみ上げる。

窓の外にはきれいな満月。

二人で一緒に月を見上げたこともあったね。

一緒に映画を見て、笑いあったね。

そしてこれからもそんな毎日が過ごせるね、レン。

そっとレンにキスをした。

GW休暇のため帰省するミュをレンと二人で見送る。

二人一緒にいることでミュもどこかほっとした様子。

「ふ〜ん。仲直りできたんだ、おめでとうさん。まあ、仲直り以上の仲になったみたいだけど？」

ずばり当てられて耳まで真っ赤になる。

「なな何を言っているのよ。べ、別にそんなんじゃないよ」

必死に誤魔化す。レンも黙っていないでフォローして欲しい。

「キスマークついてる」

ちよんつと首を指で軽く叩かれ

「嘘っ！」

咄嗟に首を隠すとミュがクスクスと笑う。レンは呆れ顔。

「冗談よ」

校門の前にミュの実家から向かえに來た車が止まる。

「でわでわ、お二人さんごきげんよう」

あたしたちも大きく手を振り返す。

静かな寮。いつもは消灯まで騒がしい廊下も今は誰もいない。

人目を気にしないでいいから、仲良く手をつないで部屋に戻る。こうやってどちらともなく自然に手を握ろうとするってすごい。今同じ事を考えているってわかる瞬間。

きつとこういう瞬間がこれからもどんどん積み重なっていくんだね。

そう思うとすごく嬉しい。

「あ、そうだ。ミユが車に乗るときレンに何を言っていたの？」

「ああ、うん。……片思い脱出おめでとって。やっと報われてよかったねって言われた」

「へ？そんなに前からあたしのこと好きだったの？」

「……教えない」

むくれるレン。決してあたし以外には見せない表情。嬉しいのを隠して

「ケチ！教えてよ！ねね、いつからいつから？」

二人でじゃれあう。

まだ教えない。

まだ恥ずかしいから。

でもいつか、

こうして二人で一緒にいるのが当たり前になったら、

聞いて欲しい、

教えてあげたい。

どれほど君が好きなのか……。

月明かりのキス3（後書き）

読んでくださって有難うございました！！

今回で「月明かりのキス」は終わります。

ただシリーズ1弾目なので、シリーズはまだまだ続きます。

（続けてもいい？）

さて今回は2年生の4月からGWまでのお話。

メインカップル（笑）ができるまでのお話です。

私はいつもノートに一度書いてからネットに乗せるのですが、徹夜で書いたラブレター並みに、ノートに書いてある文章は乱雑です
ので、清書のつもりでネットには書いています。

が！

そうなるといういろいろなシーンがカットされてゆきます。

なぜなんだろう？

「このシーンはいらねーだろ」的なシーンをカットカットしていく
と、

ノート一冊分もあるものがこんなに短くなるんです。

わお！

ただ一箇所だけ、変えてもいなければカットもしていないシーン
がございます。

それはもちろんナニのシーン。

卑猥やえぐさではなく、きれいなシーンを意識しましたが、どう
でしたでしょうか？

すこしでも「きゃー」となってくれたら嬉しいです。

さてお次は

サブキャラのミユの話です。

女の同士の恋愛がわからない、彼氏もいるミユさんですがどうな

るんでしょう？

まったく私わかりません！これからノートに書くのです。
できれば10月までにはUPしたいと思います。

今後とも何卒よろしくお願いいたします。

最後に。

エッチシーンをアドバイスしてくれたB.L.マニアの友人たちへ。
YOUたちのおかげで卑猥にならずに書けました！
ありがとう！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5280w/>

清成学園物語

2011年10月4日03時35分発行